

鳥取県南部町の里人インタビュー！

鳥取

なんぶの里人

NANBU no SATOBITO
2021 Spring

TAKE
FREE

十人十色の
里山暮らし

14組の里人インタビュー



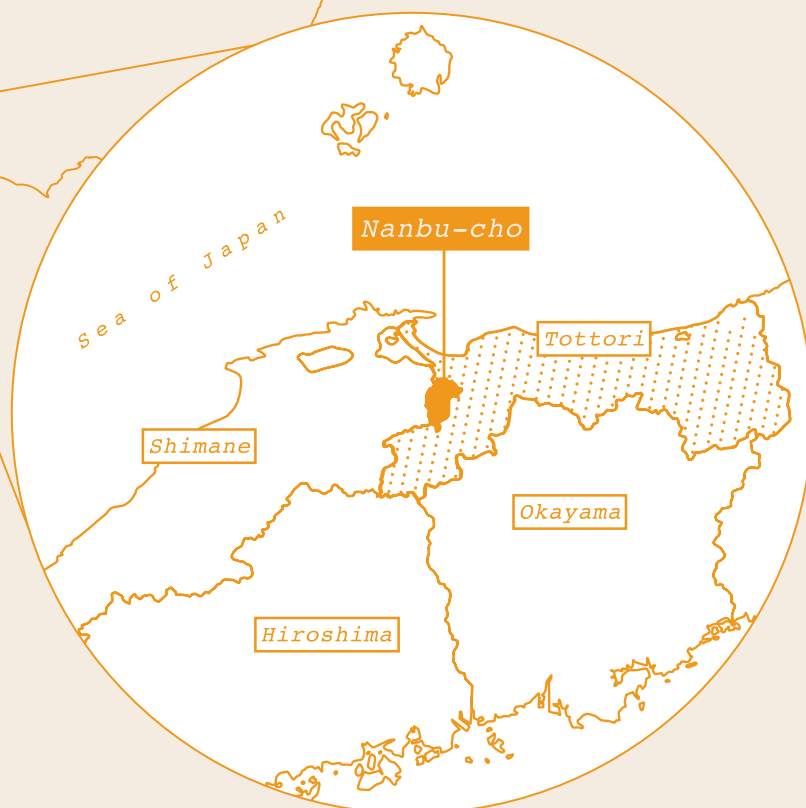
なんぶの里人

市街地から車を20分程走らせると、景色は街並みから緑豊かな山間に。
“南部町”とはいうものの県西部に位置するこの町は、
自然に囲まれた人口1万人前後ののどかな町です。

法勝寺川沿いに続く桜並木や、初夏を彩る金田川の蛍たち。
四季折々の豊かな自然を感じながら人々が暮らす、現代に残る「里山」。
環境省の生物多様性保全上重要な里地里山にも選定され、
先祖の代から守りつづけた農地や山林では
人の営みとともにさまざまな動植物たちが生きています。

この町の人は皆“里人”。

のびのびと子育てする里人一家、趣味に生きる豊かな里人、
自然のそばで働く里人……十人十色な里山暮らしを探りに
Iターンで移住してきた2人が里人14組へインタビュー。
南部町の個性豊かな里人たちをのぞいてみませんか？



移住

4 瀧山さん一家

東京からUターン・古民家カフェと焙煎所を営む4人家族

6 立元さん

大阪からIターン・ネギ農家で働く地域おこし協力隊

7 井上さん

広島からIターン・ゲストハウスの女将

8 宮崎さん一家

大阪から孫ターン・5人家族のお父さんはドラマー！

9 移住コラム 「田舎暮らし、ほんとのところ。」

農業

10 井田さん

合鴨農法に有機農法、チャレンジャーな米農家

11 高木さん

無農薬農家30年以上！90才を超えても現役農家夫婦

12 内田さん

トラクターや農機に魅せられ、夢を叶えた農業少年

13 奥山さん

森の中で牛を放し飼いするワイルドな牛農家

作家

14 角田さん

人と繋がる作品づくり。人形劇・布絵・粘土細工作家

15 服部さん

里山の空気も織り込む機織り・染織作家

町民

16 濱本さん

エネルギーシシユな南部町のお母さん

17 松本さん

イタリャ野菜に真っ赤なバイク！

18 山田さん夫婦

めだかに魅せられた仲良し夫婦

19 パー子さん・ルーンさん一家

マレーシア人と日本人夫婦の4人家族

20 里山暮らしのお手伝い

22 南部町マップ

23 おわりに

里人取材人

幅田 舞 大阪出身

2018年に南部町の地域おこし協力隊に就任し、南部町に移住。

前山 寛文 福岡出身

大学時代に訪れた南部町で里山の美しさに惹かれ、2017年に南部町に移住。

古民家カフェ&珈琲焙煎所

たきやま

瀧山さん一家

佳世さん・雅人さん・大河くん・樹吹くん

風通しの良い縁側と玄関横にある小屋のようなキッチン、そして入り口を入ると顔を見せる大きな焙煎機——。高校卒業後東京での生活を経て、30歳の時に南部町にUターン。焼き菓子と珈琲豆焙煎を主軸に、子育てをしながら自営業を営むお2人の暮らし。





『café 七草』ができるまで

中学生の頃からお菓子作りが好きだったという佳世さん。東京ではバイトをしながら製菓学校に通い、26歳の時に縁あって世田谷の小さなアパートで『Schair』というカフェを営業し始めた。カフェを始めて4年程経った頃、店の更新時期とその先のことを考えるタイミングが重なり、雅人さんの実家のある南部町に引っ越した。

1人目のお子さんを産後、現在店舗兼自宅となっている場所で『Café 七草』を始め今に至る。現在七草では、佳世さんの作る季節の果物を使ったマフィンやクッキーなどの焼き菓子、玄米揚げおむすびや不定期で地元有機野菜をたっぷり使ったお野菜サンドや井などが楽しめる。もちろん雅人さんの焙煎する珈琲も提供している。

実は七草では、ほとんどのメニューで乳・卵を使用していない。東京から南部町に引っ越す前に、カナダでワーキングホリデーをした佳世さんは、ベジタリアンやビーガンの人たちがたくさんいる異文化に出会い、自然のサイクルと近い暮らしをするカナダでの体験に強く影響を受けたそうだ。また、1人目のお子さんが小さい頃アレルギーが強かったことや、地元有機野菜農家さんとの出会いをきっかけに、野菜そのものが持つ本来の美味しさに感動したことも野菜のみを使ったメニューを提供するようになった大きなきっかけ。佳世さんの手から作り出され

るものは彩にあふれ、素材の味を知る新しい発見や驚きとともに安心感に包まれている。

「人が集い、来た人がみんな笑顔になって帰っていく。そんな場所になったらいいな。」店のキッチンからのぞく佳世さんの笑顔は、まさに来る人を元気にする太陽のようだ。



『0からコーヒー研究所』ができるまで

一方、雅人さんが珈琲豆の焙煎を始めたのは、2人が東京から鳥取へ戻ってきた頃。東京では設備・配管の仕事をしていた雅人さん。休日にはカフェ巡りや、ご近所の焙煎屋さんにもオリジナルのブレンドを発注していたほど普段から自分で珈琲を淹れることは日常だった。

瀧山さん夫妻が鳥取に戻って来た当時は、珈琲豆の焙煎屋はあまりなく、それなら自分で豆を煎ろうと趣味で始めたのが焙煎のきっかけ。そして佳世さんが七草を始めるようになり、自家焙煎し

た珈琲豆を店やイベントなどでも販売するようになった。

日中は仕事に出て夜に豆の焙煎をするというハードな生活が続けていた雅人さんだが、現在は仕事を辞め焙煎屋として独立した。そのきっかけになったのが、一度に10kgもの豆が焙煎できる大きな焙煎機がやってきたこと。それまでは七草として豆を販売していた雅人さんは、独立に伴い『0からコーヒー研究所』という屋号で焙煎屋として新しいスタート地点に立った。現在焙煎した豆は町内や米子市内の飲食店へ卸す他、週末は境港にあるゲストハウス『宿屋 Minato』にご自身が向き珈琲を淹れている。

「今までの縁や人、地域との繋がりも大事にしながら、今後は県外にも販売枠を広げることも視野に入れながら、焙煎屋として頑張っていきたい。」と話す雅人さん。

佳世さんの焼き菓子と雅人さんの珈琲、そして2人の場所が、今日も南部町の里山暮らしの中にゆつくりじっくり溶け込んで、町の人や町を訪れた人を笑顔にする。



café 七草

西伯郡南部町鴨部 82 TEL. 080-4673-6370

OPEN 水曜 13:00~17:00 カフェ営業

木曜~土曜 11:30~17:00 通常営業

第1・第3日曜 8:00~11:00 モーニング営業

CLOSE 日曜~火曜 WEB <https://nana-kusa.jp>

0からコーヒー研究所

西伯郡南部町鴨部 82 TEL. 090-4105-4158

OPEN 10:30~17:00 CLOSE 不定休

WEB <https://zerocoffee.jp>

Text : Mai Habata

就農の夢に向かって大阪からIターン！

たちもと たかひろ

立元 隆裕さん

平成30年から地域おこし協力隊として南部町に移住した、町の若者の人口率を上げる貴重な存在。ネギを中心に、野菜を栽培する株式会社『福成農園』で、就農の夢に向かって日々農業に勤しんでいる。



きっかけは農業研修から

鳥取県立農業高等学校で4ヶ月の農業研修プログラム『アグリチャレンジ研修』を受けたことがきっかけで、地域おこし協力隊の制度について知り、とんとん拍子で南部町に移住することが決まった立元さん。大阪出身にも関わらず、幼い頃から自然に囲まれているのが好きで、自分の肌に合っているのも田舎の環境だという。中学や高校では生物や自然に関しては熱中して勉強していたそう。そんな感覚を持った立元さんだからこそ、自然と常に触れ合っている仕事である農業に興味を持ったのも不思議ではない。南部町に来て不便なことがあるか問いかけると、「大阪よりも住みやすい。車とネット環境さえあれば南部町は大丈夫。全く不便ではない。」と語った。

人との繋がりが大事

彼から農業の話を聞いてみると、しきりに言っていた言葉。「農業は一人じゃできない。人との繋がりが鍵になる。」農業を始めるにあたって、まずは土地、そしてたくさんの方の技術習得や機械設備が必要になってくる。その時に活きてくるのが「繋がりが」だそう。

「農業は困難だらけ。困った時に手を貸してくれたり、相談に乗ってくれたりする人がいるととても助かる。」

それを体現するかのようには、農業関係の繋がりはもちろんのこと、地域のお祭りやイベントなどに積極的に参加をして、繋がりを作っているそう。

将来は自分で農業をやること

立元さんに夢を尋ねると、
「自分で農業をし、ゆくゆくは会社も作りたい。そのために、地域おこし協力隊の任期中にはしっかりと地づくりをしたい。」と語ってくれた。具体的には、お金を貯めることや技術習得、そして先ほども言っていた繋がりがづくり。彼には将来を見据えたしつかりとしたプランがある。

「今は部分的な作業で学ばせてもらっている。この任期で成し遂げたいのは1から10まで全部自分で作ってみたい。」

それを横で聞いていた若社長さんは、
「鳥取で農業という産業に目をつけてやるのはとても面白いことだと思う。土地が広いし、人の繋がりの面でも田舎が有利。農業は結局一人ではできない。試行錯誤しながら農業というものを学んでいくって欲しい。」と彼にエールを送った。

20〜30代の若い社員が半数以上で、活気のある株式会社『福成農園』。そんな中で、1次産業を盛り上げようと、楽しみながらも奮闘している立元さんの今後がとても楽しみである。



Text = Hirofumi Maeyama

住民、子ども、旅人をつなぐゲストハウスを運営

井上可奈子さん

地域おこし協力隊として着任し1年間の準備期間を経て、地域住民と一緒に、食べて泊まれる寄り合い場『てま里』を2019年4月にオープン。ゲストハウスの運営を担当し、地域住民と旅人の出会いの場を作っている。

出会いと環境が未来を作る

「なぜゲストハウス？」という質問をすると、話し始めたのは「教育」の話。ゲストハウスと教育がどこで繋がっているのかピンと来ないかもしれないけれど、これは彼女にとつて欠くことのできないキーワード。

元々広島県出身の井上さんは、東京の大学に進学し日本語教師と英語教師の免許を取得。

卒業後は広島FMでイベント企画などの仕事をしていた。その後、自分の方向性を考えゲストハウスの運営を目指すことになったのだが、その経緯には自身の大学時代の体験が大いに影響しているようだ。

ある時大学で将来何になりたいか？という話になった時のこと。ある子が「教授になりたい」と答えた。その子の祖父が実際に教授であることを知った時、「周りの環境」がいかに選択肢を作り出すかということを井上さんは痛感したそうだ。

また、旅行好きで旅先ではよくゲストハウスに泊まっていた井上さん。一人旅でもそこにいけば誰かに出会え、人と繋がることができ、自分の世界も広がる場所。

そんな「ゲストハウス」で子どもに英会話を教えることができれば、子ども達がいろんな人と出会い繋がる場所、機会を与えることができるのではないかと思い、「ゲストハウスで英会話教室をやりたい！」と考えるようになった。しかし実際に子どもに英語を教えたことがなかった井上さんは、まずTeach for JapanというNPO法人を通して埼玉県の中学校で実際に教壇に立ち、経験を積むことにした。

2年間の任期を終えた後、鳥取に移住していた友人がきっかけで、南部町でゲストハウスを始めたかどうかという話があることを知り、地域おこし協力隊として着任した。

形になった夢とこれから

オープンまでの1年間は、地域の人には自分の名前を知ってもらうことから始まった。新しいことを新しく来た人が始めることは、容易ではない。いろんな壁にぶつかりながらも本当に「形」になった夢。

今では『てま里』は、地域の方がふらっと立ち寄ったり、ママ会が開かれたり、特に休日には小学生から自転車で遊びに来る高校生まで、幅広い年代の人たちの笑い声が絶えない。

もちろん、英会話教室も計画通り始まっている。「宿泊客の集客など課題はもちろんあるけれど、これから『てま里』を運営していく中で、地域の子ども達が好きなことを見つけたら、南部町のことを誇りに思ったりするきっかけを創る場所作りがしたい。」と話す。



小さなカフェとお宿のある寄り合い場『てま里』
西伯郡南部町天萬 897 TEL.0859-21-1527
OPEN 11:00~21:00 CLOSE 水曜
※日程・時間はご相談に応じます。
WEB <https://temari.tottori.jp>

Text = Mai Habata

お父さんはドラマー！

みやざき

宮崎さん一家

貴良さん・咲紀子さん・海寧くん・偉紋くん
祖母 富永武子さん



祖母の家に移り住む孫ターン。
安心感がありつつも、戸惑い
や驚きを経て今に至る生活と、
新天地で繋がった縁。

孫ターン

出会いは大阪だったというお2人。ご主人の貴良さんは高知県出身で、高校卒業後関西に就職。仕事をしながら音楽活動をする生活を9年ほど続けていたが、なかなか思うようなバランスで両立ができず、仕事を辞めてアルバイトをしながら音楽活動をしていたそう。一方、伯耆町出身の咲紀子さんも高校卒業後、大阪に進学。保育士を目指し専門学校に通っていた。同じバイト先ということがきっかけで付き合いだしたお2人はその後結婚し、第1子である海寧くんが誕生した。

子育て環境や生活環境を考え、ゆくゆくはどちらかの両親の近くに住むほうが安心だと以前から話していた貴良さんと咲紀子さんは、2017年に鳥取に移住。

鳥取を選んだ1番の理由は咲紀子さんの実家が近いということもあるが、ひとり娘の咲紀子さんのお母さんは伯耆町に嫁いでいるため、祖母の武子さんが1人で暮らす南部町の家を継ぐ人がおらず、武子さんも高齢になってきたという理由から、南部町に引っ越して一緒に暮らすことを決めたそう。

お父さんみたいに叩けるかな？



新しい生活



引越しは、祖母の家に住むということで家探
しや地域に馴染むという部分で安心感があつたと
話すお2人だが、もちろん戸惑いや驚きもあつた。
集落の集まりごとなどが比較的多く、休みの日
は何かしら地域活動があるのが少し大変に感じる
部分があつたり、近所の人はみんな知り合いで家
の鍵も開いていたり、都会と比べて人との距離
が近い分初めは慣れないことも多かったそうだ。
子育てにおいても、保育園で大阪弁をしゃべる
海寧くんのイントネーションに周りの子が反応し、
少し精神的に苦勞することがあつたり、小学校に
入り学校までの距離が歩いて40分以上かかること

には驚いたりもしたそう。ただ、集落行事は「み
んなで町を守つていこう」という地域の姿。それ
はとても良いことだと思ふし、人との近さも慣れ
れば安心感に変わる。子どもの学校生活も落ち着
いてきて、親としても安心できるようになつてき
たと話す。

出会いと音楽

音楽を辞めて南部町に移住してきた貴良さん
だが、2年ほど前から町内に住むメンバーで『月
光』というバンドを組んでいて、町内の音楽ライ
ブに出演したり、米子駅前立ち飲み屋で定期的
に演奏したりしている。実はこの『月光』のメン
バーは全員町内在住。音楽活動の傍ら、米子で立
ち飲み屋を営む三原わたるさんに集落のお祭りで
出会つたのがきっかけだった。意気投合して結成
した『月光』に加わつたのが、ベースの昭倫さん
（しょうりん）なんと隣の集落にある大安寺というお寺の住職だ。
バンドの練習は音楽スタジオの他、大安寺でも
やつているというのもまた斬新。

「移住して良い出会いがあり、趣味としてまた音
楽をできてとても良かった。」と貴良さんは話す。
「3年経つてようやく色々な生活が落ち着き、楽
しめるようになってきた。」と言う宮崎さんご夫
妻。どの様な環境であれ、「移り住むこと」は
やはり大きな変化。文化も習慣も大きく違う都会か
ら田舎への移住において、新しい生活を楽しめる
ようになるまではいくつか山を越えなければなら
ないかもしれない。ただ、その中で新しい人と繋
がり面白い「縁」があることは移住の醍醐味のひ
とつなのだろう。

Text = Mai Habata

移住コラム

田舎暮らし、ほんとのところ。

自然の中で暮らす ということ。



自然が近いということは動植物と
も近いということ。庭や敷地の草刈
りなどは自分で管理しなければなり
ません。また地域の清掃活動もあり、
自分たちの住んでいる地域はみんな
で協力して管理しています。山や畑、
田んぼが近いので害虫（ムカデ・ア
リなど）が家の中に侵入してくるこ
とがあります。あらかじめ防虫剤を
設置するなど準備が必要です。

車があれば 都会より便利!?



田舎の生活には自動車が必要。路
線バスは本数が少なく、自動車での
移動が大半となります。逆に、車が
あれば都会と違って渋滞のストレス
もなし！ほとんどの駐車場が無料、
海や山、温泉が車で約30分圏内に
あり、マリンスポーツや釣り、スキ
ーやゴルフ、登山やキャンプなどを手
軽に楽しめます。冬はスタッドレ
スタイヤが必要になります。車関係の
準備を忘れずに。

地域のお付き合いを 大切に。



田舎では深い人間関係を築き、近
所との付き合いを大切に。必要な時
は助け合いながら暮らしています。
「田舎でひっそりと人付き合いなく
暮らしたい」という方は田舎暮らし
には向きません。地域の行事やお祭
りに積極的に関わっていくことをオ
ススメします。積極的に関わること
で、地域に住む人との距離が近くな
り、自分の住む地域をより知ること
ができます。

合鴨農法に有機農法、チャレンジャーな米農家

井田 真樹さん

青々とした鮮やかな田んぼと、元気に歩き回る鴨。この鴨たちこそ田んぼの害虫を駆除してくれる井田さんの味方だ。果樹農家から米農家になった経緯、そして合鴨農法を経て、有機農家としての井田さんの今とこれから。

有機農家と合鴨ファーム

高校卒業後2年間東京に住んでいた井田さんが、実家である南部町に戻って、両親の果樹園を引き継いだのは20歳の時。既に結婚し子どもがいたので、梨や柿を育てる農園には小さい子どもも自然と出入りしていた。農業を散布したばかりの農園では、大人は気をつけて手を洗うが、子どもは色々なものを手にとったり口に入れたりしてしまふ。その時に「子育ての環境としてこれでいいのか？」と疑問を持ったのが、有機栽培を始めたきっかけだった。

米の有機栽培を始めたのは、果樹は無農薬では難しいという事と、その後20年以上続けることとなる合鴨農法について勉強していた時期が重なったこと。田んぼなら生き物もいるし有機でできる、子どもにとっても良い環境を作れるのではないかと思ったからだそうだ。そうして始まった米の有機栽培の道。当時合鴨農法に興味を持ち勉強していた井田さん。ある日、隣の田んぼの方から「来年から合鴨やるからよろしくね。」と言われたことに触発され、「私もやります！」と即答したそうだ。

そもそも合鴨農法とは鴨を田んぼに放すことで、田んぼの厄介者である害虫等が餌という資源に変わり、またその鴨は食材となる。「無駄のない循環が生まれる完璧な農法だと思う」と井田さんは話す。

今でも合鴨農法の良さへの考えは変わらないが、「合鴨で食べていく！」と熱意を燃やしていた30代の頃と今とでは気持ちに変化があるそうだ。農家として規模を拡大したいと思っはいるが、それが合鴨農法を大規模化するという答えにはならなかった。もちろん合鴨農法は続け

ていくが、今後は「有機農家」として農業規模を拡大していきたいし、これからは次世代の若者たちにそれを伝え引き継いでいくことを大事にしていきたいと話す。

なんでもやってみる

思いつくことはなんでもやってみるという性分の井田さん。実は機織りや陶芸、パン作りなど農業とは離れたことにも挑戦したことがあるそうだ。現在力を入れているのが、日本酒作り。井田農園のお米で作った日本酒を『ブッポウソウ』という名前で、北栄町と湯梨浜町の酒蔵2社でブランド化して作っている。

「南部町には酒蔵がないが、南部町の酒を作りたい。」と熱意を燃やす。

90歳まではトラクターに乗りたいと話す井田さんのエネルギーの源は、きつと新しい物事への好奇心と、思い立ったらまずはやってみるという行動力にあるのだろう。

研修生を募集中！

合鴨農法や有機農法に興味のある方、やる気のある方、大歓迎です♪ご連絡はコチラまで！
TEL. 0859-64-2647



まっとうるよ！

Text = Mai Habata

無農薬農家30年以上のベテラン夫婦！

インタビュー 美鈴さん

高木 節夫さん・美代子さん

無農薬農家になって30年以上。自転車に乗り畑に向かう微笑ましい後ろ姿。90歳を超えてもワクワクしながら生きる現役農家夫婦の元気の秘訣とは。

いい食べ物は 身体を元気にする！

今から50年ほど前、立て続けに病気を患った節夫さんと美代子さん。

まずは体の毒素を出さないといけないという美鈴さんの友人の勧めで健康食品を始める、2人の体調はみるみる改善されていった。健康食品でなくても「良いもの」を食べると元気になる！ということを実感した高木さん一家。このことが米作りや野菜作りを無農薬で始めるきっかけになった。

しかし無農薬野菜や農法が、当時はまだ消費者・生産者共にあまり関心のない時代。一般に受け入れられるのは難しく、手間はかかるのに収入に繋がりにくいというのが現実だった。美鈴さんは、なんとか野菜を販売しなければと地元のスーパーに飛び込み、野菜販売の地産地消コーナーを設けてもらい、2年間、スーパーに毎日出向いて実演販売を続けたこともあった。

現在は米子市内のお店での店頭販売、野菜の配達・配送、そしてイベント等で出店販売をしている。また、県内外のレストランで野菜を使ってもらえるようにもなった。

ただ、継続・持続することはとても難しいこと。だからこそ高木農園の新しい挑戦は続く。

節夫さんも美代子さんも元気だとはいえず、年齢を重ねていく中で、今後は若い生産者に南部町だけでなく、鳥取西部を担っていつてもらいたいという思いがあり、美鈴さんはイベント出店などを通して若い人と繋がっていくことも積極的に進んでいるのだそうだ。

元気の秘訣は大地から

- ・ いい食べ物を食べる
- ・ 誰かのために頑張る
- ・ 希望を持って生きていく

90歳を過ぎても夫婦健在・現役農家である高木さん夫妻の元気の秘訣。

「体の不調を訴えることもなく、来年は何作ろうかと楽しみに話している。『これを作って欲しい！』と頼りにされること、『誰かのために』ということが元気の源で、そういった楽しみがいつもポジティブでいることに繋がっていることを実感しますね。こういった大切なことをいつも大地から教わっていると思うんです。」と話す美鈴さん。

「農業は『手間』『お金』にならないし、生易しい世界ではない。だけど、『覚悟を持って』そこに取り組み、難しいことでも一つの光はどこかに差しているから、諦めないで欲しい。」

農業に限らず、他の何にでも当てはまる「覚悟」という言葉。決して柔らかくはない言葉だけど、その厳しさの裏に優しさと期待、そして生まれ育った町への思いが込められている。



Text = Mai Habata

農機に魅せられ夢を叶えた農業少年

内田 雅史さん

「農業大好き少年」の夢と彼を応援する地域の思いが形になった『農事組合法人 寺内農場』。およそ42ヘクタールの土地で米を中心に大豆やそばも栽培している。

農業少年の夢

内田さんは幼い頃から祖父母や親の農業を身近に感じ、「将来は地元で農家になる」と夢見てきた農業少年だった。

小学生の頃から休み時間は校長先生とトラクターに乗り、繁忙期には終礼がなるが早い学校を後にして田んぼに行く。地元の中学校を卒業した後は、鳥取県立倉吉農業高等学校、鳥取県立農業大学校を卒業し『農業への道』を着実に進んでいた。

そうした内田さんの農業への夢をずっとそばで見えてきた地元の人たちは、若い担い手の雇用体制を作るため、2002年に農事組合法人を設立した。そして、大学卒業後すぐに同法人に勤めた内田さんは現在作業課長を務めている。「農機がきっかけだったから農業を目指すようになった。」

内田さんは無類の農機好き。特に海外製の農機は馬力も大きさも凄まじく、北海道で開かれる農機の展示会には毎年行くそうだ。

もちろん農機に乗りメンテナンスをするだけが仕事ではない。作業計画、事務作業、従業員への指示などを統括する傍、地域の集まりごとへの参加や、同業者との交流も欠かせない。

農家にとっては当たり前かもしれないが、中学生以降ゴールデンウィークがあった記憶はなく、下手すれば除雪作業で年末年始がない年もあるほどの多忙さだ。日々に追われる中でも今後の会社の方向性を考えながら、高齢化する社会と変化する時代の中で、常に農業の形に向き合い模索し続けている。

地域の人のあたたかさ

南部町のどこいうところが好きかと伺うと、「人が色々」と「ごしてくる」とこかな。」と話す内田さん。近所の人々が野菜をくれたり、困っていることがあったら助けてくれたりする、そんな人の温かさだ。※ごしてくる「くれる」

そう思うのは、小さい頃から内田さんにとって地域の人たちが先生だったからだろう。

「機械は田住の吉持さん、農機の修理は北方の足井さん、土木の知識は三崎の唯さんから...そんな風にそれぞれの分野をその道の先輩である地元の人に教えてもらったんだよ。」

そう話す内田さんの言葉からは、地域の人たちに育ててもらったという感謝の気持ちと、その期待を背負っているという責任感が感じられた。

人が人を育てる。地域の大人が子どもを育てる。機械化が進み、インターネットさえあれば何でも調べられるような時代の中で、人から人へ、大人から子どもへと言葉や経験として伝わっていくものが本来のコミュニティーの形であり、田舎だからこそ残る強みなものかもしれない。



Text = Mai Habata

森の中で放牧!? ワイルドな牛農家

おくやま しゅんじ

奥山 俊二さん

南部町で繁殖農家を営む奥山さんの家は、この道で合っていたかな…と不安になるほど山道を登った先にある。そこからさらに奥へ進むと、森の中からひょっこり顔を出してきたのはなんと牛。奥山さんが放牧する牛たちだ。



高校生の頃からの夢

奥山さんの家は名前の通り山の奥。川が流れる家の前の川沿いにはビワやウメの木、花や野草が茂っている。もちろん畑や田んぼもあり、まさに自然そのもの。

しかし驚くのは自然の風景だけでなく、家の前の道を上って行ったその先。自然の中に牛が放たれている風景だ。もちろん柵やゲートは作ってあるけれども、手を伸ばせば触れられそうなくらい間近に大きな牛たちが放されている様子は迫力満点。今でこそこの集落で牛を飼っている人は奥山さんしかいなくなってしまうが、金山地区は昔から牛飼いが多い地域で、集落内で牛馬市が開かれていたくらいだったそう。奥山家も例に漏れず牛飼いの家で、もちろんここで生まれ育った奥山さんの暮らしの中には小さい頃から牛がいた。

「高校生の頃から『牛を山に放すこと』が夢だったんですよ。」

そう話す奥山さんは、役場勤めをしながら牛の世話をし、59歳で早期退職。退職後徐々に牛の頭数を増やし、退職した1年後に『牛を山に放す』夢を叶えたのだ。また2018年の冬には家畜人工授精師の国家資格も取得している。

現在は親牛8頭、育成牛1頭を飼育している『繁殖農家』。母牛を飼育し子を産ませる。子牛は、生後9〜10ヶ月の頃に家畜市場の競り市に出すか、残して将来母牛にするかを決める。

母牛に育てる子牛は14ヶ月頃に人工受精し、スムーズにいけばその後10ヶ月くらいで出産する。そして生後18ヶ月頃に、和牛登録協会が検査をし、晴れて大人の仲間入りとなるのだ。ちなみに放牧している牛は『妊婦さん』のみで、寒い

時期は夕方になると牛たちを牛舎に帰るよう呼びに行くが、夏場は昼夜放牧なのだから。

のびとファームとブログ仲間

雄大で自然いっぱい自身のフィールドを、奥山さんは『のびとファーム』と名付けている。退職後、山の中の生活が中心となり人との繋がりが薄くなってしまうと感じた奥山さんが友人に誘われて始めたのがブログ。『じげブロ』というこのブログの『じげ』とは鳥取の方言で『地元』という意味だ。

『のびとファーム』は、このブログを通して繋がったじげ仲間たちの集いの場になることもあるそうだ。県内の様々なところから集まった個性溢れるメンバーが、山から採ったり持ち寄った季節の食材で野外料理をしたり、キャンプをしたりして楽しむ。

牛がのびのび暮らし、人が集う『のびとファーム』は、いつ訪れても魅力に溢れている場所だ。



Text = Mai Habata

角田 敦子さん

人と繋がる作品づくり。人形劇・布絵・粘土細工作家

工房に入ると所狭しと並ぶ作品の数々。特に布絵は絵画と見間違うほど繊細で美しい。米子市から24歳の頃南部町に嫁いできてはや50年以上。長年幼稚園教諭として働いた角田さんが、退職後自身で始めた新しい「ワクワク」。

おはなし・ドン

角田さんが退職後縁あって始めたこと。その1つが『おはなし・ドン』。お話のあたたかさを地域の子どもたちへ伝えていきたいという想いで始まったボランティアグループだ。人形劇を中心に、絵本の読み聞かせやパネルシアター等を公演する。メンバーはだいたい13人くらいで、それぞれが得意分野を活かして脚本から小道具作りまで全てを自分たちで行うそうだ。もちろん角田さんはその手の器用さから、たくさんの人形を作ってきた。年に数回公民館での定期公演と、依頼があれば町内の保育園や近隣市町村の施設などに向く。現在20年近く続く活動の中で、角田さんは発足から17年間団体の代表を務めたという。

「台詞を覚えるのは頭の体操にとっても良いし、何より楽しい！ 80歳までは続けたいと思っているのよ。」

そう話す笑顔は本当に楽しそうだ。

教室の始まり

人形劇の他に、自身の工房で布絵と粘土細工の教室もされている角田さん。布絵はその名の通り、布を使って絵を作り出す作品で、その細やかさと繊細さは圧巻だ。角田さんが布絵を始めたのは13年ほど前のこと。書を習いに行った時に、先生に見せてもらった一枚の布絵がきっかけでその世界にのめり込んだ。先生からある時「あつちやんのものになつてきたね。」と言われたことや、周りからの布絵を教えて欲しいという声に応え、教室を始めるようになった。また、幼稚園勤務時代から習っていた粘土細工は、退職後

に保護者さんたちに少人数で教えるところから始まり、現在は布絵と同じく自身の工房で教室を開催している。

現在は布絵と粘土細工を合わせて、おおよそ30人くらいの生徒さんが通っているそうだ。

「教室は忙しいけれど、生徒さんが来てお話をしながらたくさん笑うことで元気になるのよ。」と話す角田さん。他にも絵葉書を書いたり、木彫りをしたり、吊るし飾りを作ったり……。面白そう！と思ったことは何でもやってみるその姿勢は、幼稚園の子どもから学んだと言う。

77歳になり、今まで始めたいろいろなことを少しずつ誰かに委ねたり、ペースを落としたりしているのだそうだが、「何でもやるからには楽しみなきゃ！」と話す角田さんのキラキラした笑顔は、そうして自分の体や年齢に向き合うことも楽しんでいるように見えた。



Text = Mai Habata

里山の空気も織り込む機織り・染織作家

服部 麻知子さん

たっぷりの自然に囲まれた工房から生まれる、
空気に溶け込むような温もりある染織作品。
東京から南部町へ、染織の道を歩き続ける作
家の営み取材した。



おばあさんになっても できる仕事があった

東京生まれの服部さんが、染織に興味を持つ
たきっかけは、デパートで機織りの実演販売を
目にした時のこと。織り機という機械の仕組み
や、織り機にかけられた経糸と緯糸が、組み合
わさって布になっていく様子は当時高校生だっ
た服部さんを虜にした。

「当時は大学進学するのが当たり前になつてき
つつあった世の中。でも、本当にそれでいいの
だろうか？」と疑問を持っていたんです。」

そう話す服部さんは、進学を目指して美大を
受けたつもりも、「おばあさんになつてもできる仕
事がしたい」と思っていたそう。そんな折、高
校3年の夏休みにお父様の知り合いを頼って京
都の機織り工房を見学に行き、それをきっかけ
に進学をやめて卒業後すぐその工房に弟子入り
5年間そこで染織を学んだ。とてもこだわりの
持った先生に教わった染織は、「染料も水もそれ
ぞれの土地で違うのだから、それぞれの場所で
できるやり方をする」ということだった。機織
り機もいろいろな種類に触れ、先生から学んだ
様々なことが、後に鳥取で住むようになって活
かされているという。

南部町との縁

弟子入りした染織の先生が携わっていた、米
子市の『アジア博物館・井上靖記念館』の開館。
それについて一緒に米子を訪れていた服部さん
だったが、先生が準備中に亡くなられ、急遽仕
事を引き継ぐことになった。軌道に乗ったら東
京に帰るつもりだった服部さんだったが、当時

たまたま東京から伯耆町に里帰りされていた彫刻
家の入江達也さんと出会い、後に結婚。2年程は
米子に住んでいたお2人だったが、ご主人と親交
のあった鳥取出身の画家である、齋鹿逸郎さんの
勧めで南部町（旧会見町）にある齋鹿さんの実家
を借りることになった。

南部町に引っ越してきたのは、お子さんが2歳
の頃。当時は、嫁にきたのではなく借家人とし
て部落に入るのは珍しいことだったが、集落の皆
さんはとても温かく、またお子さんがいたこと
で地域のひととの繋がりができ、自然に集落に溶け
込んでいった。

「南部町は自然が豊富ですよね。」

東京では限られた空間で、音にもスペースにも
気を配らなければならない環境だった。一方南部
町では裏山で染色に使う材料が採れ、庭の一角に
染め場を作ることもできて、十分な作業場所がある。
「今後も、たっぷりの自然と温かい人たちに囲ま
れた中で、時間を大切にしながら、自分のできる
ことをやっていきたい。」

そう話す服部さんの作品には温もりが溢れている。



Text = Mai Habata

エネルギーシユな南部町のお母さん

はまもと かずこ

濱本 和子さん

文化や風習、その土地に根付くもの。そして人との繋がりが。現代では薄れつつある大事なものを続ける濱本さん。今日もみんなと助け合いながらパワフルに生きる、南部町のお母さんのような存在。



毎日が楽しい

「今日は朝一から豆腐作りだけん。」
「明日はこども食堂があるけんね。」

濱本さんと出会って話す料理に関することが多いのだが、実は本業は美容師。お母さんもお祖母さんも美容師さんだったことで自身も高校2年の時に通信教育で美容師を目指し資格を取得した。自宅横の『濱本美容室』はご自身が小学校4年生の頃から現在の場所にある。昔は毎日開けていた美容室は、現在は予約が入った時に店を開けるスタイルにしている、ずっと昔から通ってくれている常連さんはもう50年になる方もいるのだとか。濱本さんは美容室の傍、前述の通り豆腐づくりやこども食堂など地域での活動が幅広い。その他にも籠編みや折り紙などする手先の器用さは高校が家庭科専攻だったことが大きく影響しているのだそう。

「絵手紙を書いていたこともあったし、水泳や卓球もしてたよ。新しいことが好きだけんなんでもやってみるよ！」

そんなアクティブさが濱本さんがいつもエネルギーシユで『毎日楽しい』大きな理由の一つなのだ。

人を大切にしたら
自分も大切にされる

実は車がないと生活が厳しい南部町で、車を持っていない濱本さん。歩いていると「乗っていく？」と声を掛けられることも。米子に出た時にはタクシーで帰ることもあるが、迎えに来てくれるお友達もいて、いつもお世話になる代わりに彼女の髪を切ってあげるのだという。

また、家の隣にあるお試し住宅『えん処米や』に誰かが泊まると、朝ごはんを作って持つて行ったり、作った折り紙をプレゼントしたりする。

「みんなが助けてくれるけん、困ったことなんてない。自分が幸せだけん、人を助けてあげたいと思うんよ。」

そういう濱本さんの周りには助けたり助けられたいという関係がごく日常的にあり、都会ではなかなか無いような人との関わりや繋がりが。5月には笹巻き、彼岸にはぼたもちなど、昔は当たり前だった風習が希薄になる現代の中で、『作る』『分かんない』『という人や地域との関わりや文化がごく当たり前のようにある濱本さんの暮らしは、とても貴重で大切なことに違いない。

濱本さんには人と関わる上で大切にしている言葉がある。

「気は長く、心は丸く、腹立てず、人は大きく、己は小さく」

濱本さんの周りに人がいること、また初めて会ってもホッとさせてくれるような安心感や温かさは、この言葉を大事にしてきたからこそなのだろう。今日も濱本さんの笑顔と元気な声が、南部町に響く。



濱本さんが顔をだすかも？

お試し住宅『えん処米や』

南部町移住の玄関口。古民家を改装した住宅で、移住を視野に入れた方に宿泊していただけるお試し住宅です。

> 詳しくは p.20へ

イタリア野菜に真っ赤なバイク！

ま っ も と み き

松本 美樹さん

“無いのなら作る”そこから始まった食への興味。畑に育つイタリア野菜、そして趣味のバイクについて語るその笑顔からは、“好き”が溢れている。

食えることが好き！

「これはね、チーマディラーパって言って、菜花系。これはエルバステラ。それからこれはセルバチュ。」

畑で松本さんが説明してくれる野菜の名前はメモをしないと覚えられないような名前ばかり。そして別の場所に移動すると目の前に現れたのはなんと等身大に育ったアーティチョーク！イタリア野菜を多く作られている松本さんは、元々5〜6年前にルッコラを植え始め、それから様々なイタリア野菜を作るようになったそう。

面白い野菜を育てるのは“食えることが好き”ということが根っこにある。

食や作ることへの興味の始まりは中学生の頃。何かに掲載されているケーキを見て食べたいと思ったものの、町内にはケーキ屋が無く、これは作るしかないと思ったのが“作ること”のきっかけだった。高校は家政科に通ったが、調理コースが人気だったため被服コースに行くことになった松本さん。実は趣味で着物リメイクをして販売もしていて、この時学んだ洋裁もいつかり楽しんでいる。

結婚・出産後は、町内で豆腐の製造・販売を10年ほどしていたが、現在は朝と夕方保育園でパート勤務をしながら畑をしている。作った野菜は塩漬けやジャム、ソースやペーストなど保存食などに加工するのも得意。育てた唐辛子で自家製タバスコも作るそうだ。秋には畑以外にも、キノコ狩りをして塩漬けするのが毎年のルーティーンだとか。

好きなことを思いきり

畑や加工、着物リメイクなど多趣味な松本さんのもう1つの趣味はバイク。コッコツと貯めて購入した900ccの真っ赤なバイクもイタリア製だ。休日には息子さんとツーリングや、サーキット場を走りに行くこともあるという本格派。バイク好きはお父さんから引き継いでいるようで、なんと78歳のお父さんもまだ現役だという。

「バイクに乗ったら人が変わるよー！」

ニコニコしながらバイクにまたがる姿は、かつこいいの一言に尽きる。

「このバイクはね、足がギリギリ着くか着かないか。だから中途半端に怖がついていると転倒するのよ。進むときは進む、止まるときは止まる。人生も一緒だと思うの。」

バイクが好きな理由はスリルや爽快感など色々あるのだろうが、もちろん命がけ。だからこそバイク好きはバイクに乗ることの覚悟や心持ちと人生の生き方を重ねることが多いそう。

松本さんがいつもエネルギーッシュで真っ直ぐなのは、自分の“好き”を思い切り楽しんでいるからなのだろう。



Text = Mai Habata

めだかに魅せられた仲良し夫婦

やま だ さかえ やすこ

山田 榮さん・康子さん

南部町の奥絹屋という集落でめだかを育て、イベント等でめだかすくいを出したりもする『めだかの家』のお2人。実はめだか以外にも烏骨鶏やおたまじゃくし、時にはエビやカメなど様々な生き物に出会える場所。



めだかの家

まず、気になるのが「どうして南部町でめだか屋を始めたのだろう？」ということだ。早速聞いてみようと思ったが、先にめだかの飼育小屋へ案内されてめだかを見せていただいた。……すごい。飼育小屋の中にはたくさん種類のめだかたちがいた。

「改良めだかは繊細で管理が難しい。」

そう語るのは、めだかの家を始めて3年になる榮さん。飼育小屋のめだかは過保護なので水質と温度の調整が難しい。特に生まれたての子は体力がないため注意しなければならぬ。

だからと言って、世話をたくさんすればいいのかといえばそうでもない。餌のやりすぎや水の変えすぎによっても弱ったり死んでしまったりする。

エサ代や温度管理にかかる暖房費、水道代などもバカにならない。どうしてそこまでしてめだかの飼育することにこだわるのだろう。また疑問が浮かび、最初の質問をやつと聞くことができた。

始めたきっかけ

めだかの家を始めたきっかけは、3年前に島根県の伯太町で池に浮かぶ睡蓮の陰に川めだかを目撃したことだ。その時直感的に思ったのが、「か、かわいい。」ということだ。そこから。山田さんは取り憑かれたように町内外を探し回った。ある時、他所のめだか屋さんを訪れて様々なめだかに出会い、1万円分のめだかを購入した。それから立て続けに購入し、徐々に種類を増やしていったのだという。現在は60

70種類のめだかを飼育している。

2人で一緒にめだかを育てているが、2人ともめだかの好みが違うそうだ。男性・女性でも好みがいいたい分かれるようだ。

生きがい

そんな2人に、今の生きがいは何かと尋ねてみた。「めだかが生きがいで、めだかを子どもや孫のように思っている。見ているとつい、我が子のように喋りかけてしまう。自然と声が出ちゃうのよ。」優しい笑顔でそう答える康子さんからはめだかに対する愛情がにじみ出ている。榮さんは、「人が集う場所をつくること。めだかの家を始めたことでうちにめだかを買って来ってくれる人と出会いがある。さらに年に一度、盆明けの日曜にめだか祭りを開催していて、めだかを通して人との交流が生まれるのが楽しい。」と話す。みんなが気軽に集まれるようにカラオケ部屋も作ったそうだ。とにかく仲の良いお2人。「これから笑って暮らそう。」そう2人で決めてから、決めたことを体現して生きている姿には心を打たれた。



Text = Hirofumi Maeyama

マレーシア人と日本人夫婦の4人家族

パー子さん・ルーンさん一家

金太郎くん・小梅ちゃん

ピンクの車にピンクのカバン、写真撮影にはチャイナドレスという出で立ちでやってきたパーさんは南部町出身。そしてマレーシア出身のルーンさん。国際結婚を経て、いま里山で生きるマレーシア人と日本人夫婦。



出会いと結婚 マレーシアから南部町へ

2人の出会いはアイルランドだったそうだ。パーさんは、もともと海外旅行が好きで、当時通っていた英語教室の先生から勧められ、アイルランドのワーキングホリデーに応募した。そして少ない枠の中に見事選ばれ、3年間アイルランドへ行くことになった。ルーンさんは父親の病気の治療費を貯めるため、アイルランドに出稼ぎに出ていたそうだ。そんな2人はたまたま同じ時期にアイルランドに滞在し、同じレストランで働いていたことが出会いのきっかけだった。

交際をスタートさせた2人は、それから2年後結婚することになった。結婚を機にルーンさんの故郷であるマレーシアへと移住した。多民族が暮らしているマレーシアでの生活は、毎日が新鮮で刺激的であつたが、当時のマレーシアは治安が悪く、特に子どもの誘拐が多発していたそうだ。子どもが生まれたパーさんにとってそういった環境は安心できるものではなく、ルーンさんとの話し合いの結果、2018年に家族で日本へ帰ることにした。

日本に帰ってからは、パーさんの実家に住み始めた。静かで自然が美しく、住み慣れた南部町の生活はパーさんにとって居心地がいい。しかし、今度は逆にマレーシアで生まれ育ったルーンさんにとっては文化の違いに戸惑うこともしばしば。

「マレーシアでは、夜中や明け方まで友達や家族で飲茶（ヤムチャ）をしに行く習慣がある。日本はみんな寝るのが早いし、お店は閉まるのが早すぎる。」

ルーンさんは冗談混じりに少し不満げな表情で語った。

「いい意味で、マレーシアの人たちは後先のことを考えず、『今』を生きているのかもね。ルーンも毎日、純粋に『今』を生きているからすごい。」パーさんはそう話す。

今の生きがい

今2人は何を思っているのだろうか。

「毎日、今を精一杯生きることしか考えていない。一緒に働いているおばちゃん達がとても優しい。」そう話すルーンさんの夢は、子ども達がノーマルにハッピーであること。他に難しいことはあれこれ考えないのだそうだ。

「子どもが人に迷惑をかけずに幸せに生きてくれればいいな。そして自分自身もこの成長を通して進化し続けたい。」

そう話すパーさんは、子どもの成長を楽しみにしつつ、里山で仲間たちとヨガをすることも夢だそうだ。

子どもたちの成長を生きがいに毎日を一生懸命生きながら、今を楽しんでいる2人の生き様は純粹でとても清々しく映った。



Text = Hirofumi Maeyama

住まい・子育て・仕事……あなたの移住に向けて手厚くサポート！

里山暮らしのお手伝い

安心安全な 子育て環境

結婚、出産、子育て、暮らしやすさを総合的に支援しています。健やかに暮らし続けることができる町を目指しています。

自然豊かな 里地里山

「生物多様性保全上重要な里地里山 500 選」に西日本で唯一、南部町の全町域が指定

充実した 医療と福祉

総合病院、全個室の老人ホーム、ジムやプールを併設した総合福祉センターなどの医療福祉施設が充実！



住まい

空き家一括借上げ制度

町内の空き家を 10 年間一括借上げしリフォーム後、借家として賃貸希望者に貸し出す制度です。

> NPO 法人なんぶ里山デザイン機構

※問い合わせ先の詳細は左下へ

三世帯同居等支援制度

新たに三世帯同居を始めるための住宅の新築・購入・増改築のリフォーム費用の 1/3（上限 60 万円）を補助する制度です。> 建設課

子育て世代等応援定住促進奨励金

町内のアパート等に移住する新婚または子育て世帯の家賃の一部を最長 2 年間助成します。

> 企画政策課

定住促進奨励金制度

町内に新たに土地および住宅を取得された方を対象に、令和 2 年度に初めて新たに申請した方には 4 年間、令和 3 年度に初めて新たに申請した方には 3 年間、固定資産税相当額を交付します。> 企画政策課

若者向け住宅管理事業

35 歳以下の若者向け住宅として、平成 26 年度新たに 1 棟 4 戸を建設、家賃は月額 2 万円で 5 年間の入居が可能です。

> 建設課

公営住宅

町営住宅 172 戸、県営住宅 21 戸の管理を行っています。

> 建設課

* お試し住宅 えん処 米や

古民家を改修した住宅で、南部町での暮らしを体験できるお試し居住施設です。地域交流拠点としても活用されるまちの玄関口です。

※問い合わせ先の詳細は左下へ



子育て



南部町育児パッケージ

パパママ教室に参加すると、出産後すぐに使える子育て用品等「南部町育児パッケージ」を贈呈します。

> 子育て支援課

教材費補助

小学校1～3年生までの教材費と、小学校1～6年生までの学級費の全額を補助します。

> 教育委員会事務局

病児・病後児保育施設

生後6ヶ月から小学校6年生までの子どもが病気のため保育園や学校に行くことができない場合、1,000円/日で子どもを一時的に預けることができる施設です。

> 子育て支援課

高校等通学定期券購入補助

路線バスや鉄道を利用して通学する高校生等の通学定期券購入費用の半分の補助します。

> 教育委員会事務局

不妊治療費助成

人工授精や特定不妊治療にかかった費用の一部を助成します。

> 子育て支援課

チャイルドシート購入費補助

6歳未満の子どものために購入したチャイルドシートの購入費用を補助します。(子ども1名につき1回/上限1万円)

> 町民生活課



仕事



無料職業紹介

南部町にUターンを希望される方へ無料職業紹介事業を行っています。ハローワークと同様に全国の求人情報を検索することができ、専任の職員が対応します。

> 企画政策課／NPO法人なんぶ里山デザイン機構

起業促進奨励金

南部町に新たに移住し起業する方で南部町商工会に加入

> 企画政策課

新規就農者支援

新しく農業を始められる方、始めたいと考えている方に対するさまざまな支援制度

> 産業課

地域おこし協力隊

おおむね1年以上3年以下の期間、地方自治体の委嘱を受け、地域で生活し、各種の地域協力活動を行っていただく制度。南部町の協力隊募集状況は南部町のホームページをご確認ください。> 鳥取県南部町ホームページ

お問い合わせ



NPO法人なんぶ里山デザイン機構
TEL 0859-21-1595 (平日8:30～17:15)
www.nanbu-satoyama.jp



南部町役場 法勝寺庁舎
TEL 0859-66-3112 (総務課)
https://www.town.nanbu.tottori.jp



えん処 米や
TEL 090-9068-8543 (平日9:00～17:00)
www.nanbu-satoyama.jp/komeya/

南部町役場

企画政策課
TEL 0859-66-3113

産業課
TEL 0859-64-3783

建設課
TEL 0859-66-3115

子育て支援課
TEL 0859-66-5525

教育委員会事務局
TEL 0859-64-3787

町民生活課
TEL 0859-66-3114

NANBU-CHO MAP

- 学校・保育園など
- 観光スポット
- 暮らし



ACCESS

近隣から

- ・米子駅～車で20分
- ・山陰自動車道 米子西IC～10分
- ・米子自動車道 溝口IC～15分

主要都市から

- ・東京～米子 飛行機1時間15分
空港～南部町40分
- ・大阪～車で3時間30分
- ・広島～車で4時間

南部町

人口：10,601人（令和2年12月31日現在）

面積：114.03km²

学校等：保育所3／認定園1／小学校3／中学校2

お店等：スーパー1／直売処3／ホームセンター2

ドラッグストア1／コンビニ4／ガソリンスタンド4等

医療機関：6院（総合病院1／内科3／眼科1／歯科1）

公共施設：公民館／体育館／運動場／野球場／図書館

総合福祉センターしあわせ（運動施設、プール、お風呂）等

おわりに

南部町で生まれ育ち一生を過ごす人。

一旦県外に出たけれども南部町に戻って来た人。

縁あつて南部町に来て住むようになった人。

取材した方々それぞれに、それぞれのストーリーがありました。

「生きる」ことは「選択する」ことの積み重ね。

この里人プロジェクトに携わらせて頂いたことで、

町内のたくさんの方に出会うことができ、

「自分で自分の道を選択しているからこそ今の自分を楽しんでいる」

そんなみなさんから、取材を通して「生きる」パワーを

頂いたような気がします。

バラエティーに富んだ「なんぶの里人」がいるところが、

南部町の何よりの魅力。

是非、遊びに来てみてくださいいね！

お忙しい中、時間を割いて取材や写真撮影に協力して下さい下さった皆様、
並びに冊子作成にご尽力いただいた皆様、
本当にありがとうございました。

幅田 舞

なんぶの里人 創刊号
2021年1月発行

editor

幅田 舞・前山 寛文

advisor

西重 まり

photographer

齋藤 愛

art director

吉田 慎吾 / d-magic

designer

矢倉 麻祐子 / d-magic



鳥取県南部町 小原神社 (客神社)

photographer 廣池昌弘

世界最大の写真賞であるソニー・ワールドフォトグラフィーアワード 2020 のプロフェッショナル部門、自然・野生生物カテゴリーで 2 位受賞、IPA (International Photography Awards) の自然・天体写真カテゴリーで 2 位受賞など、国際的に評価を受けている南部町在住の写真家

